



冬期スクーリングが 行なわれました

去る1月28・29・30日、本学院にて冬期スクーリングが行なわれました。今回も北海道から岐阜県、島根県と、全国各地から12名の通信教育の皆さんが参加されました。最初は皆さん少々緊張した表情でのスタートでしたが、最終日には、アドレシ交換をするなど仲間意識が強まり、一人で学習を進めていくことは、不安でもありますが共に学ぶ仲間も増え参加者の皆さん全員が安堵感に満ちたお顔をしておりました。皆さん、3日間本当にお疲れ様でした。



「2010 冬期スクーリングに参加して」～連載1～

通信教育コース・国際中医師コース 栗林 秀樹



1月28日～30日に学院の冬季スクーリングに参加した。午前は劉海洋先生の講義、午後は安里清子先生の実習という構成であった。

最初に講義が始まる前に、劉先生は平尾安基子先生と島田涼子先生を御紹介して下さいました。今回、直接講義はしないが、スクーリング開催に当たり全面的な支援をして下さっているとおっしゃっていた。3人揃って並んでいる所から、私は、何となく、テレビ時代劇の水戸黄門を囲む助さん格さんを連想した。

初日午前の講義は、総論として、二十四節季に応じて陰陽がどのように変化するのか、また、季節毎の邪の特徴と、異なる季節や異なる邪に対してどのような四気五味を選択するのか、を主たる内容としていた(中医薬膳学)。自力で学習を進めなければならない通信生にとっては、膨大な教科書の記載を、どのように把握すればよいのか? 途方に暮れてしまうのではないかと思う。しかし、劉先生の講義は極めて明解であり、大量の教科書を読むにあたって、何処に力点を置いて把握すればよいのか、容易に了解することができた。

その後昼休みを挟み、各論として、美肌のための薬膳について、臓腑と気候を五行学説に帰着させた食養生についての講義があった(中医薬膳学)。この中で、劉先生は、漢字の形と義について触れた。例えば助陽の「助」を構成する「且」は象形で「供え物を薦める机」(説文解字)であり、「祖先」(殷武丁期刻辞牛肩胛骨)である。「助」は、併せて「祖先の力を借りる」という義なのであろう。腎は生命の根本(実用中医学)であるから、腎陽を補うのに「助」の字を用いるのも頷ける。劉先生によれば、中医学は、医学でもあり文学や歴史学、あるいは文字学などの他の学体系でもある多様な側面を持っており、学として総合的な体系を持っている。文字学の面から言えば、おそらくは「説文解字」の様な成書に拘泥するのみならず、殷代甲骨文字や金文にも注意を払いなさいという劉先生の教えであろう。一昔前の中医師は古籍を全て暗記したという。この格調高い講義が続く中で、私語は全く聞かれず、全員が真剣な面持ちで講義を聞いていた。



参加者には若齢者もいたが電話や mobile-mail の電子音が鳴ることもなかった。初日午後の実習は春の薬膳であった。詳細なメニューは「薬膳の基本」に記載されているので略す。参加者の大多数は、料理が得意な方のように、講師の安里先生に積極的に質問し、自主的に「私は〇〇をやりますからと自分の分担を宣言して、テキパキと調理を始めた。私自身は、普段は出鱈目に切っ、鍋もの位しか作らないので、早々に、洗い物当番に回して頂くよう希望した。しかし、「折角セミナーに参加したのですから」との安里先生の助言もあり、長芋の下ごしらえをすることにした。滑りやすい長芋も、先生の華麗な包丁捌きであつと言う間にかつら剥きされた。庖丁が牛を素早く解体した説話(荘氏養生主篇)の様であった。一方、私にとっては、長芋のかつら剥きは水準が高すぎる手技であつたようで、すぐに時間切れとなり、残念ながら縦に剥く方法に切り替えた。次に、剥き終えた長芋を拍子木切りする手法を教えて頂いた。思うに、このスクーリングに参加しなければ、私の人生において「拍子木切り」の実践に挑戦する機会は皆無であつただろう。今後は頑張って習得したいものである。悪戦苦闘してふと周囲を見ると他の参加者は分担してほとんどの作業を終えていた。

調理が終わり、全員でテーブルをセッティングして、分担で盛り付けし、劉先生、安里先生を囲んで試食が始まった。試食の席で、参加者の自己紹介が行われた。参加者は総数12名(女10名・男2名)であった。出身は全国各地にまたがっており、交通手段として航空機や新幹線の利用者も多いようであった。通信生としての入学動機は様々であったが、生体を全体像として捉える中医学と、健康の根幹となる食養生を真剣に学びたいという点では、一致していた。劉先生からは、「中医は西医よりも遥かに想像力を要求される。皆さん頑張って下さい。」という励ましの言葉があった。

学院はJR神田駅とJR秋葉原駅から徒歩数分という都内でも便利な場所にあり、初日終了後は、関西から来た2名の方と一緒に秋葉原駅まで一緒に帰ることにした。

